

松木満史が描き続けたテーマ「馬」に関する考察

中村理香¹⁾

Consideration of “Horse”, the Theme Matsuki Manshi Kept Drawing

NAKAMURA Rika

キーワード: 松木満史、馬

1 はじめに

松木満史の作品の中には、実に数多く馬が登場する。馬が単独でモチーフになっているもののほかに、人物と一緒に描きこまれているものも合わせると、かなりの部分を馬の絵が占めている。平成30年度松木ルミ氏(松木満史三女)から寄贈になった作品や資料の中にも、馬に関する作品、記述やスケッチ類が数多く含まれていた。なぜこれほど馬を描くようになったのか、そして馬にどのような思いを抱いていたのか、この度整理したものを中心に馬に関する作品や記述を紹介しながら考察していく。

松木満史(まつきまんし 本名 松木金七 1906(明治39)年～1971(昭和46)年)は、青森県木造町(現つがる市)生まれの洋画家である。13歳の時青森に来て、はじめは仏像彫刻を学び、後に洋画に憧れ、油絵を描き始める。1923(大正12)年、白樺派の中心人物である武者小路実篤の「新しき村」運動の会員になる。1924(大正13)年に棟方志功が設立した「青光画社」に、鷹山宇一、古藤正雄らと参加した。1926(昭和元)年上京し、1927年国画会に初入選する。以降国画会を中心に活動する。画家としての実績を重ねていく一方、1932(昭和7)年～1936(昭和11)年玉川学園中等部で美術の指導にも携わった。また、武者小路実篤と直接交流する機会を得るなど、人脈の面でも広がりを見せた。1938(昭和13)年、32歳で念願の渡仏を決行する。アカデミー・コラロッシとアカデミー・ド・ラ・グラン・ショミエールという専門学校でデッサン等の基礎を学ぶが、戦況の悪化と息子の死により1年半ほどで帰国。短い滞在であったが、フランスで彼が得たものは、明るい光を画面にとどめていく印象派の感覚と手法であった。1943(昭和18)年、従軍画家として北支に派遣されるが、天然痘にかかり1944(昭和19)年九死に一生を得て7月に帰国している。残されている従軍時代のスケッチは、柔らかな筆致ながら、確かな画家の目と技術が、戦場の緊張をよく伝えている。終戦後、家族と上京するが、1947(昭和22)年、単身帰省し、青森市の堤川の川べりに小さなアトリエを建てて住む。ここには多くの芸術家仲間たちが集い、サロンのような役割を果たしたといわれる。1955(昭和30)年、三国慶一、中野桂樹、古藤正雄、鷹山宇一といった、戦前から青森県出身の芸術家として第一線で活躍してきた仲間たちと「青生会」を結成、県立図書館で個展を開催する。1959(昭和34)年～1960(昭和35)年、東奥日報紙上に63回にわたり「青森県の素描」を掲載。1959年には第1回青森県文化賞を受賞。棟方志功が中央で評価を高めていく一方で、郷里にとどまり、青森県の美術界の中心となっていく。1961(昭和36)年脳溢血に倒れ、以降筆を執ることなく、1971(昭和46)年、65歳で世を去る。

2 「馬」を描いたきっかけについて

松木はひじょうに多くの馬の絵を描いている。なぜ、これほど馬を描いていたのか、1991年10月22日東奥日報「松木満史とその時代展」の記事を見ると「松木を知る人たちによると『戦争中、青森の幸畑に疎開した時、近くに馬を飼っている家があったから』とか『松木の干支が午年であったから』とか『当時、野沢如洋が馬の絵を得意としていたことから、馬を描くのがはやっていたから』とか『馬の絵をへただと言われたことから、馬の絵を勉強するため、繰り返し描いたのがきっかけ』とかいろいろな理由が挙げられていたが、納得のいく答えは得られなかったという。」²⁾と書かれている。

平成30年度寄贈された資料の中に雑誌「優駿」があり、その中に「美術と馬」と題して松木によって書かれた文が掲載されている。「絵の勉強に東京へ出て5、6年も経った頃、私は妙な動機から馬をかくことに興味を持った。幸いなことに、軍馬の払い下げを3、4頭飼っていた家が近くにあったので、連日馬の写生に通ったが、動いているものだけに大変むずかしく、なかなか思うようには進歩しなかった。習作を何枚かまとめては、その道の専門家を訪ねて批評を聞いて廻ったが、私の馬にはいつも欠点が多く、全く問題にしてくれなかった。失望を感じながらも繰り返

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

して描き続け、第8回の国展以来何十点かの馬の絵を発表してきたが、特別反響もなかったし、今ふり返って考えてみると、いずれも恥ずかしい作ばかりである。

白雪を見たさに伊勢に行ったり、去年の秋には木曾馬を求めて紅葉の中仙道を歩き廻り、また七戸の種馬場にゲイタイムを訪ねたが、色々と参考になりはしたものの、描く気は起らなかった。名馬をモデルに描いても、そのまま名作にはなりがたいし、いよいよ馬は私にとってはむずかしいものになって行く。

西洋の画家たちの仕事を味あうべく、昭和13、4年は私は巴里（パリ）で過ごした。何度となくルーブル美術館を訪ねては多くの名作に接したが、或る日、目標なしに館内を歩いているうちに、全く予期していなかったドガの彫刻が陳列されている一室を発見した。3、4点の踊り子を取り扱った作品のほかはブロンズの馬が20点並べてあって、いずれも抱きかかえられる程度の作品であるが、実に立派なもので感心した。

これらの彫刻は、晩年視力が衰えはじめてからの作であることを知ったが、その天分と並々ならぬ制作欲の強さには、大いに教わる点があった。絵の方でも、馬や騎手を主題にかいたものに多く心をひかれた。構成の巧みさ的確な素描と色彩の美しさは、何回接しても常に新鮮であった。

ドガのほかにも馬を描いた画家は多いが、ゴーガンがタイチ島で描いた「白い馬の水浴」や、ゴッホの馬車と数頭の馬をかけた絵もルーブルの一室に向かい合って陳べられていたが、いずれも堂々とした作品であった。ルクセンブルクでは、走っていく馬を後方から、三百号の大画面に淀みのない筆力で楽々と描いたロートレックの作や、競馬場の馬と騎手たちを描いたデュフィの連作などは、実に力のこもった優作で、毎日曜日には欠かさずに通い続けて見た。だいたい、フランスの画家たちは馬に興味を持っているらしく、好んで馬を描いている。パリの絵具屋に入ると、先ず第一に目につくのは木製の馬のモデルである。一尺足らずの小さいのから三尺ぐらいのまで並べてあるが、首や足の関節の部分は生きている馬の動作と同じように動く精妙な仕掛けがあって、首をふり向けたり走ったりのポーズも意のままに出来るので、馬を描く画家にとっては便利この上なし、という貴重な備品である。是非欲しいと思ったが価を聞いてみると、あまりに高価すぎて、とぼしい財布の私に買える品ではなかった。今でもそのことを思うと残念でたまらない。」³⁾

この文が掲載された「優駿」（ゆうしゅん）とは1941年5月創刊の日本中央競馬会（JRA）の機関広報誌として発行されている競馬情報の専門雑誌（月刊誌）である。直近に行われた中央競馬の主要競走の関連特集をカラーグラビアで紹介するほか海外・地方競馬の情報、競馬に関する科学関連項目などを網羅している。創刊号には菊池寛や高村光太郎らによる競馬に関した随筆のほか、当時の時勢から軍事関係の記事も掲載されていた。特に軍事関連はその後の太平洋戦争に突入するに従って増えていくことになる。かつては競馬関係者向けの機関紙であったため、より専門的な内容が誌面の多くを占めており、競馬・馬畜業界にとっての学術誌的な色彩がより強かった。1964年1月号以降、広報誌・情報誌としての色彩が強くなり、競馬の大衆化の一翼を担う存在となった。

松木の文章が掲載された1958（昭和33）年には、この雑誌は競馬関係者向けの機関誌としてより専門的な内容が占めていた時期である。そのような頃に競馬誌に原稿を頼まれるほど、松木は馬を描く作家として知られていたのだろうか。この記述にある、馬を描き始めた「妙な動機」については、1964年東奥日報「青森を去る松木満史氏」に次のように記載されている。「ずっと昔、死んだ長男が馬を描いてしろ、といったことがある。しかし汽車やウサギは描けるが、気に入った馬がどうしても描けない。それから馬にとりつかれましたね。写生だけでは物足りなくて馬を飼ったことまでありましたよ。馬は人間とそっくりですな、酒を飲めば踊るし怒ればあばれるし…」⁴⁾ また、松木の三女ルミ氏も、長男の土草樹に頼まれて父が馬を描き始めたと聞いていたと語っている。

初めは幼かった長男に描いてくれと頼まれたことがきっかけで、馬を描き始めたということだ。土草樹が誕生したのが1929（昭和4）年で、その頃松木は東京中野区大和町に住んでいた。実際に馬を描いてみるとなかなか難しく、近所に軍馬の払い下げの馬を飼っている家に連日のように写生に出かけたという。また、馬を描くために、名馬を求めて伊勢や中仙道、七戸まで赴いていた。いずれも名高い名馬の産地である。このように名馬を求めて、日本各地を訪ねては馬を描き続けた、松木のあくなき探究心が伺える。しかし、描けば描くほど、名馬を描くことがそのまま名画につながるわけではないことを思い知り、ますます馬を描く難しさを感じていたようだ。

1938（昭和13）年～1939（昭和14）年、渡仏した松木は、フランスの多くの画家たちが、馬を題材として描いているのを目の当たりにして刺激を受け、ますます馬を描くことに対する意欲を高めていったようである。フランス滞在中に絵具屋で見かけた木製の馬のモデルは、骨の関節の部分が生きている馬と同じように動く仕組みで感心し、手に入れたと望んでいたが、高価なためあきらめている。レオナルドダヴィンチがそうであったように、やはり骨や筋肉の付き方や関節の動き方といった体の構造に着目した解剖学的な見地から、写実的に描きたいという思いが感じられる。また、スケッチの中に騎手と共に描かれてる馬のスケッチがある。フランスの美術館でみた騎手とともに制作された馬の彫刻や絵に心ひかれ、影響を受けた作品が多くあると思われる。そして帰国後も馬を描くことに対する意欲を持ち続け、スケッチを続けている。

3 馬を飼っていたこと

フランスの絵具屋で見た、馬の動作と同じように動く精妙な仕掛けのある馬の模型を手に入れたかったと切望していた松木は、戦時中青森市に疎開し、前述の松木の言葉通り、写生だけでは物足りなくなり遂に馬を手に入れたようだ。古藤正雄氏によると、「(前略) 戦後焼け野原の青森市にやせ馬を借りて乗り回したり、堤川岸の禁酒の家には、多い日が十五人からの飲み客に襲われ、制作どころではなく、悪い顔一つせず、魚の包丁さばきも見事だったし、その話術のユーモアの魅力に客足の絶え間がなかった。(後略)」⁵⁾とある。堤川沿いのアトリエに、よく絵を教えてもらうために通ったという青森市の彫刻家・田村進氏も、痩せた小さい馬がいた話を聞いたという。乗り回したということであるので、馬を飼うことで思う存分馬に触れ、馬の生態を知り、その習性や動きを十分観察して、満足いくまで描くことができたと思像できる。

4 描かれた「馬」に関する考察

(1) 渡仏以前に書かれた馬の絵

右の写真は東奥日報(1934.5.16)「松木満史氏の国展入選『林下』好評」の記事である。「(前略)『林下』は好評を博し傑作といわれている」⁶⁾と紹介されている切り抜きで、今回寄贈になった資料の中のスクラップブックにおさめられていた。「林下」には鉛筆で「桀」と書かれている。正式な題名は「桀」である。この作品については、8月27日付の記事で、木造の文化サークルであり、松木も若いころ参加していた「土曜会」時代からの友人である彫刻家・工藤繁造の展覧会評が掲載されている。「自分の知って居る画家中、その出発に際して彼くらいいわゆる絵の拙い不器用な人はいなかったように思う。けれども彼は非常にひたむきな一本調子な男であり、粘り強い情熱家である。(中略) 国展入選作の大作『林下』は彼の全力を費やした創作的意思の濃厚なものであって彼の近來の到達した深い色彩の魅力と彼独特なロマンチックな構想と相俟って独特な魅力に観者を引きつけるものである。(後略)」⁷⁾ここでは絵の特徴として色彩的魅力と松木の持つ独特なロマンチックな構想について述べられている。その作風は白馬と人物を描く、後の作品「児と馬」「馬と少年」に通じるものがあるように感じる。



「林下」掲載記事

(2) 騎手と馬

作品①



馬のスケッチ「ドガ自由模写」
鉛筆 紙 (18.3 × 25.7cm)

作品①は、「馬と美術」の記述にあるルーブル美術館で偶然見つけたドガのブロンズの馬を見て、描かれたものだろうか。「ドガ・自由模写」と書かれている。エドガー・ドガは、印象派を代表する画家の一人である。晩年は視力の衰えもあり、デッサン人形として使用した踊り子、馬などを題材とした塑像や彫刻作品も残している。松木は、ドガのブロンズ作品の馬にその天分と並々ならぬ制作欲の強さを感じ、大いに教わる点があったと述べている。また、絵に関しても、その構成の巧みさ、素描的的確さと色彩の美しさは何回接しても常に新鮮であった。と評している。ドガの作品に偶然出会えて、感動した思いが伝わってくる言葉である。そのように高揚した気持ちでデッサンした1枚なのではないだろうか。

作品②



「馬」 墨 絵具 紙 (33.5 × 30cm)

作品④



「騎手を乗せた馬 2頭」
油彩 キャンバス (23.2 × 32.3 cm)

(3) いろいろな方向から描かれた馬のスケッチ

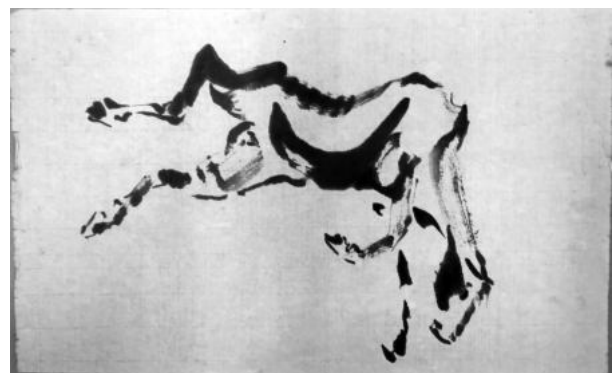
馬を描き続けた松木は、動いている馬を描く難しさを感じながらも、様々な角度からの馬をスケッチしている。松木はルクセンブルクの美術館でロートレックの作品に感銘を受けていた。アンリ・ド・トゥールーズ・ロートレックは、伯爵であった父の影響で幼い頃から馬の美しさや躍動感に魅せられていた。骨折により乗馬や狩猟を諦めざるを得なくなった後も、デッサンによって馬の魅力を描き続けた。騎手を大胆な構図で後ろから捉えるなど、馬の機敏さやスピード、力強さを描いた作品を制作している。松木のスケッチは墨やペンで全体の感じを大まかな線で短時間に描かれたものが多い。大胆な構図を模索していたのであろう、色々な角度からとらえた馬の形を的確に捉えている。

作品⑤



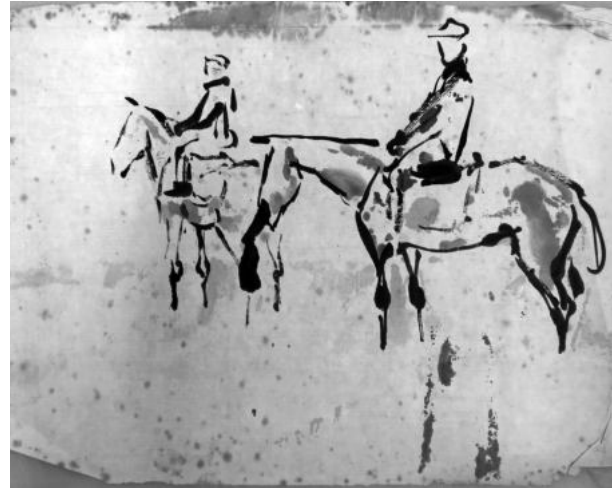
「正面から見た馬」
ペン 紙
(25 × 22cm)

作品⑥



「斜め下から見た馬」 墨 紙
(34.6 × 22cm)

作品③



「騎手を乗せた2頭」 墨 絵具 紙
(19 × 27.5cm)

競馬場の馬と騎手達を描いたデュフィの連作を見るために、毎日曜日に欠かさずルクサンブル美術館に通ったほどであるので、馬と騎手の絵を多く描いたのも納得できる。ラウル・デュフィはいろいろな競馬場の光景を数多く描いている。華やいだ社交場である競馬場の活気に満ちた雰囲気や、馬たちの軽快な動きと観客たちのざわめきを、鮮やかな色彩と線描によって描写したという。パリの華やかな競馬場を描いた絵は、松木の目に新鮮に映ったに違いない。それらの絵に影響を受けて騎手のいる馬の絵を描いていたのだろう。

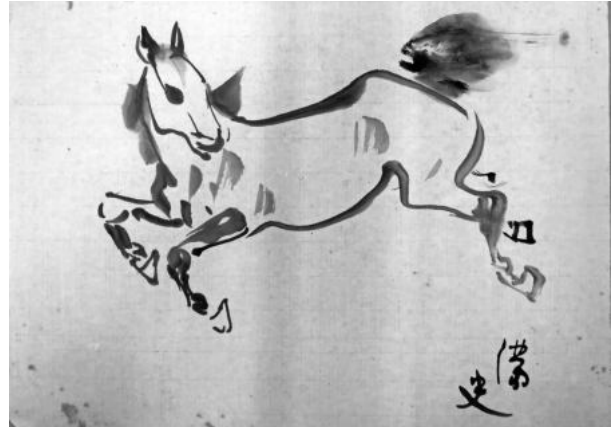
作品②は、馬と騎手を墨と絵具で描いてある。作品③は、同じく騎手を乗せた馬を2頭描いている。また、作品④の油彩画では、騎手を乗せた馬2頭を引く人も描いている。

作品⑦



「真下から見た馬」墨 紙 (34.6 × 22cm)

作品⑧



「横からから見た振り向く馬」
墨 紙 (28 × 34.5cm)

(4) 墨で描いた馬

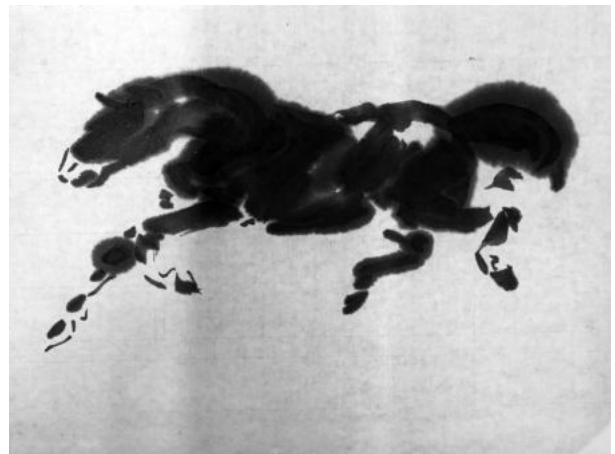
この度寄贈された馬を描いたスケッチの中では、墨で描かれたものが数多くあった。どれも素早いタッチで馬の動きをとらえて、線の太さや墨の濃淡で勢いよく、生き生きとした馬の躍動感を描いている。

作品⑨



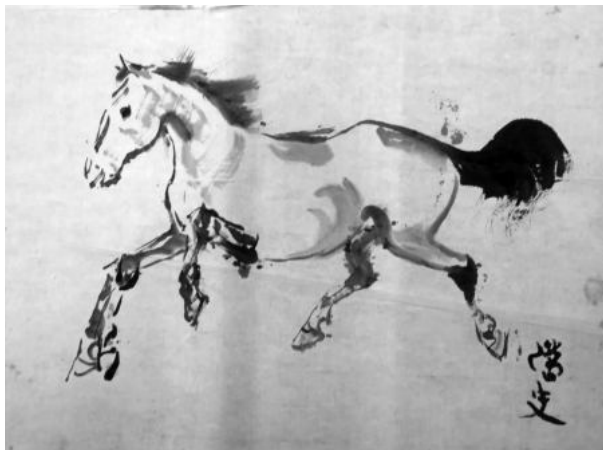
「馬」墨 紙 (20 × 27cm)

作品⑩



「馬」墨 紙 (22 × 34.6cm)

作品⑪



「馬」墨 紙 (28 × 35cm)

作品⑫



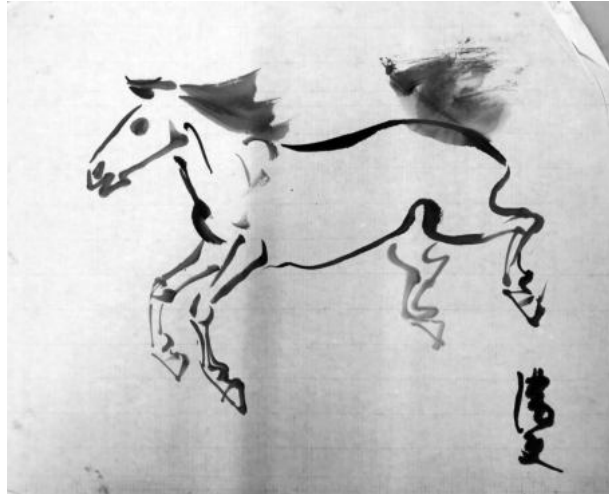
「馬」墨・絵具 紙 (28 × 34.5cm)

作品⑬



「馬」墨 紙 (28 × 34.5cm)

作品⑭



「馬」墨 紙 (28.4 × 34.5cm)

(5) 馬のいる風景

作品⑮は色紙に油彩で描かれている。すらりとした馬が佇んでいる様子を、明るい色彩で荒いタッチで描いている。松木は、油彩画以上に数多く墨画・淡彩画を描いているが、作品⑯は、山を背景にして三頭の馬が手前から中央に配されている。濃茶と薄茶と白い馬で、淡い色で彩色され、奥の白馬は背景に溶け込むように描かれている。

作品⑰



「滝と馬」
油彩 キャンバス
(89.5 × 71.3cm)

作品⑮



「馬のいる風景」
油彩 色紙
(27 × 24cm)

作品⑯



「馬のいる風景」
墨 絵具 紙
(146 × 33.5cm)

作品⑰は、油彩画で剥落が多く見られるが、1955（昭和30）年に第29回国展に出品されたものであると思われる。奥に描かれた滝に向かう白馬が木々の緑に包まれている。この絵が描かれた時期に、多くの馬の絵が国展に出品されている。1948（昭和23）年第22回国展には「馬のいる風景」を3点、1950（昭和25）年第24回国展には「初秋の馬」と「少女と馬」、1951（昭和26）年第25回国展には「馬遊ぶ」、1952（昭和27）年第26回国展には「馬駆ける」、1954（昭和29）年第28回国展には、「湖畔の馬」を出品している。また、「滝と馬」が出品された年に銀座の資生堂ギャラリーで行われた第3回個展では、「蹄鉄打ち」「馬驚く」という馬の作品を展示していた。

（6）人物と描かれる馬

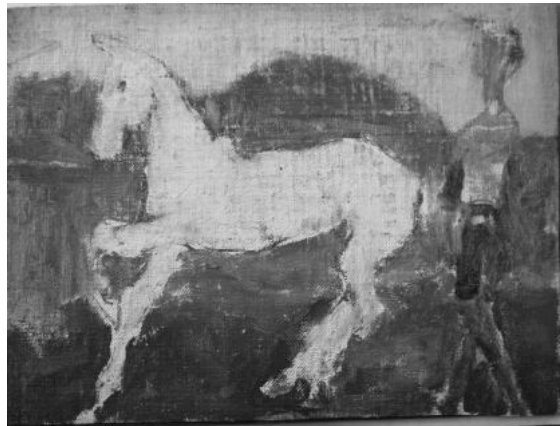
松木は、人物と馬を組み合わせて独特の構図と色調で馬を描き続けた。それは、先に紹介した 1934 年第 9 回国展入選作品「桎」に描かれている作風を引き継いでいるように見える。

作品⑱



「馬と少年」鉛筆 絵具 紙
(23 × 26cm)

作品⑲



「馬と少年」油彩 キャンバス
(17.3 × 23cm)

作品⑳



「児と馬」1939 年
油彩 キャンバス
(90 × 71.3cm)

作品⑱⑲⑳ともに白馬と少年が描かれている。⑱は鉛筆でラフにスケッチしたものに淡く色付けされていて、未完作品のようであるが、サインと落款がある。あえてこの作風を残したことも考えられる。⑳は、保存状態が悪かったため剥落が激しく現在修復中であるが、この度寄贈された作品の中で大変貴重なものの一つである。というのは、この作品は、1938～1939（昭和 13～14）年、フランス滞在中に描かれ、1939（昭和 14）年にパリで行われた第 2 回パリ・日本美術展に出品され首席賞を受けているものと思われるからである。当時の様子は、「広告界第 16 巻第 19 号」（1939 年 9 月号）に紹介されている。「児と馬」「パシェ」といういずれも馬を描いている絵の写真が掲載されている。

作品⑳は、新収蔵ではないが、松木の集大成といわれる作品であり、代表作でもある「ラリュース」である。独特の印象的なタッチで背景に馬が描かれている。「ラリュース」はフランス語で月を意味し、la lune と綴る。2017 年に行った松木満史展のブックレット「松木満史作品選」の中でこの企画の担当をした和山大輔氏は、「言葉遊びのようにだが、lune をローマ字読みすると「ルネ」となる。松木には生後 8 か月ほどで亡くなった次女のルネがいた。松木はこの題の中に、幼くして天へ昇った次女の名前を潜ませ、密かな鎮魂の図としたのではないだろうか。」⁸⁾と述べている。松木が人物を描くときのモデルは、奥様や子どもたちといった家族が多く、家族を大事にしていた松木である。ここには、「馬っコ描いでけろ」と言われて、馬を描くきっかけを作った長男、19 歳で亡くなった土草樹や、幼くして亡くなった次男量樹、フランス滞在中に亡くなった五男洋介への鎮魂の思いも込められている気がしてならない。

また、松木の晩年の作品は、ペインティングナイフで塗り重ねた絵具を削り取る技法で描かれている。田村進氏の回想によると、松木に絵を習っていた田中昭氏が師である松木に「なぜ絵を描かずに削ってばかりいるのか。」とよく尋ねていたという。それに対して、松木は「削っているのではない。描いているのだ。」と言っていたという。「松木は、昭和 26 年 8 月 19 日付の東奥日報のインタビューの中で、影響を受けた画家として、マチスとブリアンシヨンの名前をあげている。」（1988.3.19 東奥日報「青森の美術家たち」より）⁹⁾ アンリ・マチスは、フォーヴィスム（野獣派）のリーダーとして活躍した画家の一人である。野獣派の活動が短期間で終わった後も 20 世紀を代表する芸術家の一人として活動を続けた。形も色もどんどん単純化させて、純粋に色彩の効果について探求を続けた「色彩の魔術師」と呼ばれている。ブリアンシヨンはマチスの影響を受けて中産階級の日常を描いた画家である。

「ラリューヌ」もまた、マチスの絵のように構図が単純化され、人物と馬を中心のモチーフにしなが、画面は平面的に描かれている。また、ペインティングナイフで表面に向かって重ねた絵具をナイフで磨くように削り取るという新たな技法を用いている。削ることによって見えてくるいろいろな色の光が効果的に浮かび上がり、人物は、様々な色が溶け込んだ鮮やかな金色の明るい光の中にいるようである。馬は少女を気遣うように身をよじらせているが、もはや輪郭がぼやけてぼんやりとした影として存在している。画面全体が色調を抑えた静かな幻想の世界のようだ。

若い時から印象派にあこがれ、色彩を追い求めてきた松木が最後にたどり着いた境地は、やはり描き続けた馬を重要なモチーフに据えて、見る人の心を揺さぶる独自の光を放ち続けている。

「ラリューヌ」は、まさに色彩の魔術師を目指した松木の集大成であり、新たな技法への転換となる作品といえるのではないだろうか。

作品②



「ラリューヌ」1961年
油彩 キャンバス
(116 × 72cm)

5 おわりに

平成30年度に寄贈になった作品の中に、馬を描いたスケッチ類が数多くあり、中には同じ馬をいろいろな角度から墨で描いたスケッチや、途中まで描いたもの、馬の足の角度を修正している習作も多くあった。馬の形も日本のもの、外国のものもあるようだ。今回はこれらの作品や資料を中心に紹介し、馬を描き続けた松木の思いや、作品について考察してきた。様々な技法で描いたり、他のモチーフと組み合わせたりして描き続け、馬は松木の作品を象徴するものの一つになっていった。写生だけでは物足りずに、戦後青森市で遂に馬を飼ったというエピソードが、より強く印象に残る。さぞかし濃密に馬と触れ合い、心ゆくまで観察し、スケッチしたのであろう。馬を描いた数多くの作品を目にして、描くことのむずかしさを感じながらも、馬を描き続けた松木の思いを強く感じる事が出来た。今後は、馬の絵の調査を更に進めながら、馬以外のテーマについても調査・研究していきたい。

6 謝辞

貴重な作品・資料を青森県立郷土館へ寄贈し、調査に協力していただいた松木ルミ氏に心から謝意を申し上げます。

註

- 2) 1991年10月22日東奥日報「松木満史とその時代展」より
- 3) 1958年3月1日発行 月刊競馬総合誌YUSHUN優駿3「美術と馬」国画会会員 松木満史より
- 4) 1964年 東奥日報「青森を去る松木満史氏」より
- 5) 1977年4月7日東奥日報「超写実の世界を目指す—松木満史画伯の人と画業—」より
- 6) 1934年5月16日東奥日報「松木満史氏の国展入選『林下』好評」より
- 7) 1934年8月27日東奥日報「松木満史氏の個展を観る 工藤繁造」より
- 8) 2017年 青森県立郷土館企画展「松木満史展ブックレット」より
- 9) 1988年3月19日東奥日報「青森の美術家たち」松木満史より

(参考文献)

中畑長四郎『津軽の美術史』 北方新社 1991年
 青森県立郷土館『松木満史とその時代展』 1991年
 青森県史編さん文化財部会編『青森県史 文化財編 美術工芸』 青森県 2010年
 青森県環境生活部 県民生活文化課 県史編さんグループ編『青森県史叢書 近現代の美術家』 青森県 2012年
 青森県郷土館 研究紀要 第28号「青光画社」考—棟方志功生誕百年にちなんで 對馬恵美子 2004年
 青森県郷土館 研究紀要 第41号 松木満史研究のための序論 和山大輔 2017年
 青森県郷土館 研究紀要 第42号 松木満史の初期作品の評価 和山大輔 2018年